（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	稲井 啓之
論文題目	中部アフリカ・カメルーン半乾燥地における内水面漁民の移動性に関する人類学的研究		

（論文内容の要旨）

本論文は、アフリカ・カメルーン北部の半乾燥地を故地とし、遠方への出稼ぎ漁をおこなうムズグンの人々の調査から、漁民の移動性と漁業という生業のもつ特性について考察したものである。

第1章では、本研究を始めるきっかけとなったムズグン漁師との出会いのエピソードを紹介した後、そこから漁業という生業形態の特性に関心を持つに至った経緯を述べた。次いでこれまでの人類学におけるアフリカ漁業研究および出稼ぎ漁師についての研究を概観し、さらに調査地域の気候レジーム変遷と、現在の降雨量の不安定性に対する人々の対処行動について整理を行っている。

第2章では、申請者がムズグン漁師に関して行ってきたこれまでの調査概要を、時系列に沿って、東部州ンゴコ川、極北州ロゴーヌ川氾濫原（ムズグンの故地）、極北州チャド湖ダラック島の3地域の順に述べ、次いで、ムズグン民族についての概要を記述している。

第3章では、ロゴーヌ川氾濫原におけるムズグンの漁撈活動の特徴と、出稼ぎ漁開始の要因について述べている。氾濫原では、川の氾濫サイクルに合わせて、漁撈をはじめ農耕、牧畜などの多様な生業が営まれている。河川水位が大きく変動する増水期と減水期に漁は活発化し、とくに氾濫期に下流域より遡上する魚種を対象とした漁は、1年間の生活費をまかない得るものである。出稼ぎ漁の本格的な始まりは干ばつが頻発した1980年代半ばであったが、まず母村から300km離れたチャド湖への出稼ぎ漁が開始され、その後、1,000km 以上離れたカメルーン東南部の漁場などへも出漁がおこなわれるようになった。出稼ぎ漁従事者の大半は未婚男性であり、自らの結婚資金を得るために出漁していた。出稼ぎ先は、すでに移住している同郷者との社会ネットワークに考慮しておこなわれていた。

第4章では、チャド湖ダラック島における出稼ぎ漁の実態と、そこで行われている鮮魚取引について記述している。チャド湖は古くより燻製魚、日干し魚の供給地として知られていたが、近年、保存・運搬技術や流通路の発達により鮮魚の売買も可能となってきた。従来の加工魚取引においては、漁師たちは取引商人から漁具や現金の貸与を受け、漁獲物を返済に充てる慣習があった。しかし鮮魚取引においては、漁獲に用いられる漁具は安価なものであり、また取引相場が安定しているため、商人との固

定的な関係は見られなかった。調査村の未婚のムズグンたちは、鮮魚取引に携わることにより、比較的自由に漁撈に携わり、現金稼得の手段を得ることができていた。

第5章では、カメルーン南東部を流れるンゴコ川に赴いたムズグン漁師の漁業戦略と、地域住民との共生の状況を記載している。この地域では近年、商業伐採活動によって労働者の食料需要が増加し、「よそ者」であるムズグン漁師が入り込む余地が生まれてきた。地元の漁師は狩猟、農耕をも含めた多角的な生計を営んでいたが、ムズグンたちは対照的に、短期的な漁獲量の最大化を図る形での漁を行っていた。両者の関係が顕在的な対立に至らない背景には、地元漁師の掛け売りや借金の踏み倒しを容認するといったムズグンの社会的な配慮が存在した。次いで、この地へ赴いたムズグン漁師のライフヒストリーの分析から、異なる環境において、体力・知力を注いで漁撈活動に従事する「インテンシティ」と、チャンスがあるとすぐに行動に移すことのできる「即興性」という、「漁師の気性」の特性を明らかにした。

第6章においては、ここまでの記述分析を踏まえて、アフリカ内水面における漁撈活動について考察している。漁師たちもつ「漁民性」とでも呼べる特性は、水産資源へのアクセシビリティに起因すると考えられる。漁業は資源を育てる農耕や牧畜と違って、魚という資源を採捕することによって成立する生業活動である。漁師たちは常に、不安定な資源の状態を即座に判断し、次の手を考えて行動しなければならない。漁師たちは、活動へのインテンシティと状況への即興性をもって対応することで、このような不安定な状況を乗り越えていた。最後に、このような漁師のもつ性質を踏まえて、「よそ者」の参入が大半を占めるアフリカの漁撈活動においては、従来のように固定的で閉じたコミュニティを前提とした資源管理にかわって、移動民をも含む多彩なステイクホルダーがかかわる状況の丹念な把握のもとに漁業資源管理が計画されるべきであることを論じた。